

財団法人金原一郎記念医学医療振興財団主催、医学書院「総合リハビリテーション」編集室後援の「第 19 回総合リハビリテーション賞」授賞式が 2011 年 9 月 28 日、医学書院本社で行われた。

受賞論文は、武田正則氏（吉備高原医療リハビリテーションセンター）、他による『脊髓損傷者における車いす上除圧・減圧姿勢の検討』（総合リハ 38：563-569, 2010）である。

当日は本賞の生みの親であり、「総合リハ」編集顧問の上田敏氏より、賞状・盾・賞金（10 万円）が論文筆頭者の武田氏に贈呈された。

2010 年発行の「総合リハ」第 38 巻に掲載された投稿論文 46 篇のなかから、編集同人による推薦を経て、編集委員会において武田氏らの上記論文を「総合リハ賞」と決定した。

受賞論文は、脊髓損傷者の褥瘡予防指導のため、車いす上での除圧姿勢の効果を客観的に評価し、姿勢変更による除圧効果を明らかにすることを目的に、脊髓損傷者 43 例を対象に、車いす上における前屈位、側屈位、後側方位、35 度後方傾斜位（介助）の 4 姿勢について、それぞれ坐骨部の接触圧を圧力計測装置で計測したものである。その結果、頸髄損傷者では前屈位で両坐骨部、側屈位で反対側坐骨部の接触圧最高値が有意に減少し、また胸・腰髄損傷者では前屈位と側屈位ともに両坐骨部の接触圧最高値が有意に減少することを明らかにした。またその他の姿勢では有意な減少はみられなかった。

褥瘡予防のためにはプッシュアップが最も有効と考えられているが、実際には脊髓損傷者 1 人でできないことも多く、その場合には前屈位が最も有効であり、次いで側屈位が有効であることが明確となった。さらに、後側方位や後方傾斜位などの他の姿勢では有意差が認められず、除圧姿勢として現在指導している姿勢には、必ずしも十分な除圧効果が得られないものも混在していることを指摘している。

編集委員会を代表して伊藤利之氏（横浜市総合リハビリテーションセンター）は講評のなかで「今回の研究は、脊髓損傷者の車いす上における両坐骨の接触圧測定という、今では計測機器さえあれば日常臨床のなかで誰もが測定可能な方法を用いたもので



受賞者の武田正則氏

あり、その意味では必ずしも新鮮味はない。しかし臨床経験としての知見を客観化するという臨床研究の基本を実践したものであり、対象数が 43 例と比較的多く、得られたデータの客観性が高く、論文の完成度が高い。そして何よりも評価すべきポイントは、選定した除圧姿勢が実生活に見合ったものであり、臨床現場における褥瘡予防指導にすぐにも利用できる方法であることである」と高く評価した。

武田氏の所属する病院では脊髓損傷の患者が非常に多く、再入院された方の褥瘡発生が多いことから、褥瘡委員会が発足し、武田氏はそのメンバーの 1 人である。この研究は繰り返し褥瘡が発生する患者さんが多いのはどうしてのなかとという日々の臨床の現場での疑問から始まったとのこと。そして「これからも患者さんに還元できる研究、患者さんの役に立つ研究を続けていきたい」と臨床現場で役立つ研究への熱意を語った。

本賞は、職種を問わず、「総合リハ」誌に論文掲載時に 45 歳までの若い研究者の論文がその受賞対象となる。年々投稿論文数が増え、狭き門ではあるが、本賞をめざして、ふるってご投稿いただきたい。